

浄土

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日「津輪省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和五十年三月二十五日印刷 昭和五十年四月一日發行



第四十一卷

第四号

1975

4

至心不斷

呈蓮淨音

二至心不斷二

横内淨音

(長野県上田市呈蓮寺住職)

至心不斷は、大正七年このかた六十年間の
信条としてあることであつて、『仏説無量壽
經』光明歎德章の、若し衆生ありてその光明
の威神功を聞いて日夜に称説して至心不斷な
れば意の所願に隨いてその国に生ずるをえて
……に依るもので、阿彌陀如来の護念加被力
によつて、最後臨終の夕には、正念往生有難
しと自分勝手にうけとり、更に六十年來の歩
みは、阿彌陀如来の加被増上によるものであ
ると、有難く信じている。

学窓を出てから、次々に念願して来たこと
は、時代の変遷により消長はあるが、一つ一
つ実現して来たことは、阿彌陀如来の加被力
のおかげであると、有難く受けとつてゐる。
至心以て、あせらず縁具さえすれば、必ずお
育てがいただけるものであり、六八の願にあ
てはめて、無上の悦びとしてゐる。

思うこと仰せなりけり果して、弥陀のみ
もとにかえられるうれしさが、現在の心境であ
つて、ありし日の法の友が、半座のこして待
つていてくれることであらう。

四 月 号



目

次

至心不斷……………	横 内 淨 音
仏陀降誕とその現代的意義……………	塩 入 亮 達…(2)
御忌に思うこと 以心伝心の教え……………	吉 田 嘉 雄…(6)
現代のモラルを考える③盗み	
盗み……………	山 本 空 外…(10)
「盗み」について……………	岩 井 弘 融…(13)
盗み一回教・ヒンドウ教・仏教 ……………	佐 藤 良 純…(16)
欧州宗教見聞録③「開教寺院」……………	安 居 香 山…(19)
書の四季① 癸丑暮春蘭亭曲水の宴<1>……………	林 錦 洞…(24)
ご法語に聞く 法然上人の人と生活④	
赤子念仏がよきなり……………	宝 田 正 道…(26)
念仏行者 徳本上人の名号石……………	嵐 瑞 激…(31)
心の履歴書②……………	川 内 知 光…(34)
念仏ひじり三国志⑬ 法然上人をめぐる人々……………	寺 内 大 吉…(38)

表紙 久住静雄画

カウト 大正大学美術部



仏陀降誕とその現代的意義

塩入亮達

(大正大学教授)

1 降誕聖地、ルンミンデーイ

今から既に十年も昔になったが、一九六五年一月三十一日、北インド、ゴラクプール駅を午前九時の列車に乗るとノーガル駅に昼少し前に着く予定である。インドの列車は特にローカル線になると時間が不正確である。

ノーガル駅からバスに乗ってインド国境を越え、ネパール領に入る。当時はインドと中国とは険悪な時期であったが、バスポートを国境で簡単に調べる程度でほったしたことを記憶している。ルンミンデーイという標識を見て、ここが仏陀釈尊の生れた地であると知ると、何とも云い知れない興奮を覚えた。

北インドから僅かネパール領に入ったところであるが、午後の太陽は、まぶしく照り、その静寂さは別世界にいるようで、緑も美しい。インド大陸の奥地で、今から二千五百年とは言え、その間著しい地形上の変化もなかったろうから、釈尊ご生存当時のこのルンビニー誕生の地をそのまま偲ぶことができよう。

2 ぼつんと建つ仏堂

仏陀誕生地附近は現在ぼつんと石造の堂宇が建てられ、堂内には誕生仏が祀られている。

粗末と言えば誠にその通りで、セイロン系の僧侶がわびしくも堂を守っていたのが今でも印象的である。

一八九六年から七年にかけて、インド政府の命でヒュール氏がネパール領を踏査し、そして現在のルンミンデーイ村が誕生地であることを確認した。

何しろ、荒廃した草木の中から発見したのであるから、仏陀誕生の地が人々から長い間忘却され放置されていたわけである。

同氏はその時、マガダ国王からやがてインド全域を統一したアショーカ王が仏教に帰依して、釈尊降誕の聖地を記念して法勅文を刻まれた石柱を発見することによって、歴史的にも生誕の地が明らかとなった。そこには次の意味のことが書かれてある。

「天愛喜見王（アショーカ王のこと）は、灌頂（即位のこと）二十年に、自らこの地に来て供養した。釈迦牟尼仏（がここで）降誕したまいたればなり。石馬を作らしめ、石柱を建てさせた。ここでバガボン（釈尊）は降誕されたから、ルンビニの村は免租し、八分の一を払うのみとする」と。

五世紀の初め頃、法顯三蔵は長安の都を出発して敦煌からインドに入り、そしてインドの西の方から次第に東

に移動して、釈尊の居城であった迦維羅城（カピラバース）に至り、ルンビニを訪れている。

法顯の旅記は「遊天竺記」「仏国記」などと呼ばれて有名であるが、十数年にわたってセイロンやスマトラを経由して帰国した高僧で知られている。

法顯三蔵の記するところによると、カピラバース城から東方五十里のところにルンビニ園があり、釈尊の生母、マヤー夫人がこの園の池に入り、身を洗浴されてから、池の北岸二十歩程のところに樹の枝に手を挙げてすがられた。その時東を向き太子を出産された。太子は出生されると七歩行かれた。

その時二竜王が太子の身を洗浴され、法顯三蔵が訪れた時には、井戸とその池があり、僧侶たちの飲用に使用されていたということである。

私の随想であるが、インドも北の方に行くと十月頃から急に冷えこんでくる。寒暖の差はつきりする。そして二月頃は日本の春で気候もよくなる。北伝仏教の伝えるところにより、日本や中国では釈尊の降誕を四月八日に相当させている。マヤー夫人がこの池で洗浴され、無

憂樹と名づけられた樹の下で産気づき、ご出産された光景は冬の寒い時ではうつりませんし、花の楽園ルンビニを想像すると、まことにふさわしい気がする。

私はこの降誕の地ルンビニ園の浴池を眺め暫しぼだい樹の大木の影が水面に静かに投影するのを見つめながら思いに耽った。

この池の傍に接するようにマヤー堂が建立され、石段を数段登ると堂内はうす暗いが、マヤー夫人像と太子の像と明らかに判断できる像が目に入る。目鼻も何も削り取られた状態であるが、おそらくヒンドゥ教徒の手によってであらう、真赤な粉がぬられているのが印象的であった。

3 六三三年、玄奘三蔵も訪れる

このお堂のすぐ裏手にアショカ王建立の石柱が保存されているのだ。

法顯三蔵のところでも記したが、降って七世紀、同じく唐都長安を発った玄奘三蔵は「大唐西域記」(第六卷)の中に次のように記している。

「臘伐尼林(ルンビニ林)に至る。ここには釈迦族の浴池が有る。澄清皎鏡として雜華弥漫す。其の北二十四五歩に無憂華樹有り、今已に枯悴す。菩薩誕靈の処なり」と。

更に玄奘は、太子が生れた時、二竜神が現われて、太子に産湯をかけた井戸が二つあり、そこから二竜神が踊出したところだと記している。そして、一族の者たちが皆その水を求めて馳せ来り水浴をしたといわれる。

その近くに、前に記したように大石柱があり、無憂王(アショカ王)の建立したもので、その一番上部に馬像があったが、後に悪竜霹靂の為に折れてしまっていたと記しているから、馬像は雷によって柱の途中から折れて地上に仆れて残骸でもあったのであらう。

マヤー夫人は産後、近くを流れる油河で入浴して身を洗ったと言うことであるが、玄奘が訪れた時は普通の水となっていたが、油河というから、すべすべした清水の流れであったのであらう。

玄奘法師の西域記には伝説として、マヤー夫人の腹に入胎されたのは、アシャーダ月、即ち中国では五月十五

日、或は五月八日で、誕生はベシーシャキャ月、即ち春時の二月十六日から三月十五日で、後半の八日、つまり三月八日、或は十五日を当てているという。因みに同記には、太子が頭髮を剃り出家したのも十九歳或は二十九歳の三月八日又は十五日と云われている、と紹介している。

4 人間釈尊の出現と大事

釈尊の出現について、最も重要な事柄は、仏教を開いた仏陀釈尊の降誕、真理を体得された成道、そして教法の説法を開始されたことと、クシナガルで入寂されたことであるが、今日仏教が世界的宗教の一つとして仏教徒人口を誇るのには、仏陀となられた釈尊が生誕されたからであり、更に人間釈尊が人間の生存の不安と悲痛な苦しみからいかにして逃れることができるのか、この問題を解決するために、当時の宗教家、哲学者たちの中から概念的、抽象的、非現実的と思われるものから脱し、社会的差別の制度に対しては平等主義を唱え、仏門出家の社会では、国王や大臣、官長も、宗教的に強い教権を保

有する階層の者たちから最も低階層に至るまですべてに對する當時の階級觀念を破った革命的思想であつたし、この思想は人間の上で、人格の上では個々の人格の絶対性にまで及んで、ほとけと言う理想的的人格完成者たる覺者としての尊嚴を認めた主張にまでその哲學的理論を深めさせ、人間に最も重大な希望を与えていった。

私たちは、もう一度人間釈尊の出現について考えてみなければならぬ。

仏教という宗教の上から、仏陀とともに、普遍的な理想實現を志さなければならぬのが大乘仏教の真髓であり、釈尊も自らの解脱から、結局衆生救済の為に多くの利益を与えた。専門研究によれば釈尊自身出家の当初から衆生救済の目的があつたと言う証拠は、阿含資料に関する限りまったく存しないといわれる。ここにも仏陀釈尊における人間性という点で大いに共鳴できるし参考になる。歴史の時日と共に仏陀をより一層高いところに置くあまり、その人間性に対して現代人は余り無関心であり過ぎるのではあるまいか。仏陀の生誕という事實は私共人間に無上の希望と親しみを感ずる。



— 御忌に思うこと —

以心伝心の教え

吉田 吉吉 雄

(東京都目黒区幡竜寺住職)

四国の流罪地より帰られた法然上人は、暫らく大阪郊外の勝尾寺に逗留せられた。

柴の戸にあけくれかかる白雲を

いつむらさきの色にみなさん

この歌はその頃のものであるが、建暦元年十一月京都の東山に帰られたのである。

浄土開宗されてからすでに三十年余の月日が流れて多くの弟子達はそれぞれ各地において盛んな布教活動が続けていた。

信者達は全国にその数を増し、選択集をはじめとして多くの著作もできて教義は確立され、なすべきことを十分果され

たというお氣持だったように思われる。

勝尾寺の僧達へ衣類や沢山の經典も寄贈され、弟子の聖覚法印に經典の解説を命ぜられた程のゆとりがあったようである。

しかし、京都へ帰られた頃から次第に健康は悪い方へ向われ翌建暦二年正月二日より、特に食が進まず、上人のお伝記によると「耳目朦朧もろもろにして色を見、声をきき給うこと、ともに分明ならず」としてゐるさうに、耳目もかなり衰えられご不自由だったようである。

病床の法然上人は高声の念仏をつづけられながら弟子達の問いに専ら往生の話を以って答えられたと伝えられる。

上人ご臨終のことについては、くわしく伝えられており、慈覺大師伝承の九条の袈裟をおかけになり、頭北面西にして光明遍照　十方世界　念仏衆生　攝取不捨の文を常の如くとなえられ念仏相続のうちに八十年のご生涯を静かに終えられたのである。

釈尊は印度において沙羅双樹の林の中で同じように静かな涅槃に入られ、法然上人は静かな念仏のうちに往生の本懐をとげられた。

このご臨終のありさまは、後世の仏教徒のあこがれの姿であって自分もこのような臨終でありたいと願いつづけるものであった。

思えば上人のご生涯の時代は、源平争乱の時代で狂乱に似たはげしいうつり変りに終始した年月であった。

生きる望みも力もなくなった人々が多かった。骨肉相争い、憎み合い、故郷を失い流浪する人々は日本歴史の中でも最も多い時代だったので、この地獄絵図さながらの世に救いの手を待ちのぞんだのである。

「諸行無常の春の花は、是生滅法の風に散り、生滅滅已の秋の月は、寂滅為楽の雲にかくる」

この涅槃経の、すべてのものは流転し、すべてのものは無常であるという仏教の高い哲理——人生観もあきらめともい

うべき受けとり方でしかとらえることはできなかったであろう。奈良時代に仏教が日本に入ってきて以来多くの寺は建てられ、美しい仏像は彫られたけれども、自分の犯した罪障のゆるしを乞い滅罪を願ひ、たたりをおそれてそれからのがれることのみを願って生きてきたのであった。わづかに自分の生きている国家の繁栄と平和とをいのり、自分の苦悩を越えることはできなかった。自分の内奥にある苦しみと悲しみを救ってもらう道はなかったのである。

法然上人の求道の姿の中に、この時代の苦悩が凝結していったと言えるのではないか。

法然上人の求道精進のきびしさは、当時のどんな修行者よりも深いものであったと思う。

上人のご遺言は勿論終生忘れ得ぬものであったろう。父時国公のご遺言は勿論終生忘れ得ぬものであったろう。しかし私は最も強く上人を支えたものは人々の悲痛な叫びではなかったかと思う。不幸な多くの人々の声は、比叡山黒谷に必死なる勉学と修行にうちこまれていた若き日の法然上人の心を強く打ったものであろう。

上人ご自身の求道のためならばあれほどの智慧のすぐれた上人であればその目的を達することは至難のことではなかったと思う。

また、ご自身の得られたものを伝えることも多くの秀れた弟子達もあつたことであるから困難なことではなかつたろう。

しかし、上人の心には特定の人の道はなかつた。誰でも救われてゆく道だけがあつた。

煩惱あるが故に仏の慈悲はあるという確信があつた。罪惡生死の凡夫と自覺した人々のみが仏の救済をうけ得るという宗教の本質に関連した確信があつたと思う。真に仏法を受けつぎ、伝え得る者は凡夫であるときえ考えられたのである。

永遠に仏法が伝えられてゆく真実のあり方は、どうしても人から人へ伝えられて行くのでなければならぬ。煩惱を持った人から、煩惱を持った人へ伝えられて行くのが仏法であるというところに如来の大慈悲心をみたのである。

法然上人四十三才の開宗の文を拝読する度毎に、この確信にみちた気魄が感ぜられる。

浄土宗第二祖鎮西上人も、元祖上人のお口より直接このことを伝えられたのであろう。

口授心伝とも称されるものである。人々は各の心と顔とをみせあつて伝えられるものが、仏法の真の姿である。

最も自然の流れである。上人の説法のやり方は、法爾自然即ちあるがままの姿でよいことなのである。今の私は

決してあるがままの姿ではないのであろう。無用な力の入つた不自然なのが今の自己であるにちがいない。

上人の歿後の弟子達の動きの中にそれはよくあらわれていると思う。唯黙々として故郷に帰り、また縁ある場所を求めて布教活動をつづけた者が多かつた。

それよりも特に弟子とも名乗らず、宗派も言わず、極く自然な形で念仏生活をつづけた多くの人がいた。上人ご臨終の折に語られた「予が遺跡は諸州に遍満すべし」の語がほんとうであつたのである。

法然上人以後信仰の持ち方、仏教のうけとりの流れは変わったのであつた。

仏教が日本に伝来して四世紀程経過して、はじめて日本人の心にとらえられた仏教の姿であると思う。

ここに一・二の伝承を伝えておきたい。

私は東京目黒に在住しているが近くに明王院という寺があつた。明治初年頃廃寺となつて現存しないが、この寺の境内に常念仏堂があつた。この念仏堂は「八百屋お七」の恋人であつた吉三に因縁がある。

お七が火刑されて後、吉三は悲しみのあまり出家し、名を西運と改め、廻国の聖として諸国回遊の旅に出るのである。僧というからは、どなたか師匠もあり、仏門の作法も学

ばねばならないが細かいことは何も伝えられていない。

お七の菩提を弔うためであったことは間違なく、時に十九才であった。

幾十年かの月日がたち、西運は江戸にもどって目黒不動尊近くの明王院に住し念仏三昧の日々を送っていたのである。

ところが、丁度法然上人の五百年の御遠忌を迎えるにあたり、西運は念仏堂の建立を思い立ち、終に完成を見、西運はこの堂宇での念仏三昧をつづけ九十才で往生を上げていく。

法名は「生蓮社方誓念阿西運」とあり、元文五庚申十月四日建立の墓に刻まれている。

確かに法名は念仏聖のものである。元文五年は一七四〇年であるから、法然歿後五三八年であった。明王院方天台宗の寺であったので、西運の墓は近くの天台宗の寺に現存している。

この伝承は八百屋お七の芝居として脚色された部分があるかも知れないが、法然上人と関連をもつことによって不思議と八百お七の菩提を弔う西運の姿が生きかえって来るのである。西運が廻国の道中で味ったであろう生活が如何に淋しいものであったとしても、法然上人の登場することにより、念仏聖として救われていた一人の人間が浮びあがってくるのではない。

法然上人の流れはこんな味合いがある。

次に「法然聞き書きノート」の著者高橋良和師が「仰観の灯」を紹介されている。

法然上人の出生地である誕生寺の近くに、表木という所がある。その近くの田圃の中に「仰観の灯」と伝承される小さな灯籠が現存している。この地で上人の母上が、毎夕灯籠に火をつけて、わが子の無事を祈念されたものと信ぜられている。

「仰観」とは法然上人が修行された比叡山を仰ぐという意味であろう。法然上人を思う母上の心を伝えるものである。

ところが、この灯籠の横に昭和十五年四月と彫られた表柱がならんで建てられている。

かたみとはかなきおやのとどめてし

この別れさへ又いかにせん

法然上人母子の別離の時に母上の詠まれた歌がそこに刻まれているというのである。

この表柱は女の人によって建立されたというが上人歿後七百五十年余も経過した今日、「仰観の灯」の横にこの表柱を建てた人の心の中に、生々と伝えられてきたものがあった。

この伝承を聞いた時、しみじみと人の心のあたたかさを感じとらずにはいられない。



盗 み

盗 み

Ⅱ 現代のモラルを考える Ⅱ

△ 第三回 ▽



山 本 空 外

(広島大学名誉教授
京都府山城町法蓮寺住職)

「盗み」ということは、考えていけばいろいろの方面もあり、際限ないほどである。この「盗み」のことだけを取り出して考えることもでてきも、それはいわば外面の一角でしかない。少し掘り上げていくと、どうして盗むことになるかのつながりも広く、且つその浅深がさまざまである。前に世間をさわがせた、白バイのふりをして三億円を盗みとった一件にしても、もとより盗みにはちがいないものの、白バイの制度そのものは最近になってのことで、またその制度も必要な

ほどの社会機構においてこそ三億という大金の盗みもできるわけで、そうした点では現代生活に特有な形である。といっても現代における盗みが、みなそうした形のものばかりともいえないであろう。そのことは個人の盗みにとどまらず、石油ショックの際の大会社の不当値上げから、国際条約における領土問題等々にいたるまで相通するようである。むろん半ばは時代的であっても、また半ばは古来のままの衝動から生じていることは、「盗み」の現象の諸相にかぎらず、概して

その他諸現象一般についてもいえることである。

もともと「盗み」は、古来仏教でも「十惡」の一つ「偷盜」として重視し、その十惡にたいして十善（十善戒・十善業道）がまとめて力説されるのである。真言宗の高僧慈雲尊者（1718—1804）のときは、これを『十善法語』として論述し、当時一世を風靡した仏教通論ふうの名著をのこされた。十善とは周知の通り、不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不両舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見であるが、いちおう別々に説けるものの、十惡としては『貪・瞋・痴』に根ざすものと見られるので、これが一人格の心相である以上、それぞれ引き離しては説き尽くすことはできないようである。もとより現代は科学の時代で、しかも宇宙時代といわれるまでに進展したところから、しらずしらずそのほうに傾きすぎて、科学では取りくめない心の深いところをも、物質的に割り切ろうとする偏見のために、自然や人間の破壊は取り返しのつかないまでになろうとしている。いわばだいたいの社会になりつつある。この危機を救えるものは、モラル・宗教のほかないと思われるが、そのモラルや宗教自身にもなさないような問題がないとはいえない。

十惡の一つ一つが別の方面があるとともに、また互いにつながりながらあり、したがって十善にしても同様なので、そ

うした関係を窺うために、他の論題の「十界」（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上・声聞・緣覺・菩薩・仏）についていえば、「一心十界」ともいわれるようなものである。その「一心」にかかわる原点こそ宗教的問題なので、したがって一心十惡でもあり、また一心十善でもあろう。

尤もモラルのほうは、その語源から見ても、社会的風習に根ざすので、すでにアリストテレス（BC384—322）もその晩年の『ニコマコス倫理学』のはじめに、倫理（エトス）と風習（ヘトス）とは発音の長短の相違にすぎず、倫理も風習から生じてくるものという（1103頁）。これと比すれば、宗教本来のものは「一心」といわれるその心の主体的根源にもとづくものである。その歴史的道程を追跡すれば、時代的社会的形態の把握になるが、そうなれば科学的次元に位することになり、宗教本来の面目とはいえない。

少なくとも仏教では、釈尊（BC466—386）のさとられた「緣起」（後に竜樹（150—250）はそれを「空」と説いた『中論』四）にしても、また印度・中国の仏教全展開が法然上人（1133—1213）の称名念仏「南無阿弥陀仏」におさめられるにしても、どのみち仏教であるからには、かの「七仏通誡偈」（智顗『法華玄義』二上）を離れることはなからう。すなわちその原本パーリ文ダンマパダには、

「一切の悪を作さず、善を行い、自己の心を浄めること
(sa citta pariyodapana)」、これが諸仏の教えである」

『法句經』一八三偈

とあり、この場合「盗み」の悪も、その根ざす心が浄まらなくては、じつは悪ということも、ほんとうはわからないので、議会の論争や北方領土の交渉のようなことになるまででしかない。縁起・空・称名にしても、これをいかに論議したところで、それでは宗教とはいえず、せいぜい宗教論でしかなかろう。『般若心経』の巻首にも「観自在菩薩行深般若波羅蜜多」とあり、その「行」一字の漢訳は、じつは梵語では二字になっており、すなわち「行を行ずる」(チャリアームチャラマーノ)であり、この二字の「行行」は称名念仏においても同様で、法然上人の浄土宗開宗の発火点にもなったと思われる、初唐善導大師(613—681)の『観経疏』第四における、いわゆる「一心専念弥陀名号……」の三十四文字の直前に、「行行者是名正行」とある。『心経』も念仏もかように「行を行ずる」原点上に立っている。でなければ「自己の心を浄める」すべもなかろう。現代のごとく利害打算の唯物論的生活においては、自然や人間の破壊を増大するのみで、畢竟するに自滅の道を急ぐのみであらう。

「行を行ずる」とは、利害手算の故に生活するのでなし

に、大自然のいのちを、じかじかに各自なりに生きていく生活の内面的至高至尊の生き方にほかならない。但し「般若波羅蜜多」「智慧で彼岸に到達した」という生活目標は、極く少数の智慧あり、また能力ある人にしかでき難いから、これを「平等」に、すなわち誰でもすぐいかなる場合も円成しうる生活方法として、「南無阿弥陀仏」の称名を「選択」されたのが法然仏教、法然上人の浄土宗にほかならない。かかる「平等往生」の仏教は、本来の仏教理念でありながら、これを現成したところに、法然上人の宗教改革空前の本義が窺える。上人の名著『選択本願念仏集』の劈頭、この書題の直後に「南無阿弥陀仏往生之業念仏為先」と御親筆で特に書せられている(京都盧山寺本)。世界的名著のうちで、巻頭に、南無阿弥陀仏と親書されたものは他に類なく、しかもその下の句そのものは恵心僧都(941—1017)にもとづくとはいえず、その「往生」の本義は、『選択本願念仏集』の中心とも見られる第三章において力説される「平等往生」、すなわち「一切衆生平等往生」にほかならない。この「平等」にあたる言葉は西洋になく、西洋にはイコリティ(同等)しかない。かくして「同一律」にもとづいて科学は進展しても、それだけでは深刻な公害のゆえに人類も地球もおしまいになるのほかならう。これを救うものは「平等」の原点上に立つ生活しかない。すな

わち各人各様なりに、各民族各様なりに、それぞれそのいのちの中身・含蓄の豊かさを全うするのほかに途はない。

この意味での「平等往生」を目指したのが、中国より伝来した諸宗派と相違して、わがくにはじめて開創された法然上人浄土宗なのである。ここにたとえ「盗み」の悪を犯しても、犯さなくても、平等に各自各様にいのちの根源に照らされて、自己の心も浄まる真実の人生が開け全うされるわけで、このいのちの杖としての南無阿弥陀仏の生活を通して、



「盗み」について

「盗み」につながる十惡までが、そのまま十善業道へと深まるところに、モラルの限界が宗教によって円成される。犯した惡そのものは消すすべはないが、この體驗を主体的内省において生かし深めて、以て自・他平等の大自然のいのちを各自なりに実らし全うする生活の光がそれぞれなりに周囲を照らすところに、宗教の面目があり、モラルの及ばないものがある。後者に多い善・惡の論議を越えて、前者における行を行ずる実践に徹したいものである。

岩井弘融

(東洋大学教授)

盗みは、いつの時代も犯罪の典型である。犯罪には人殺し、強盗、火つけ、などいろいろあるが、世間を騒がす割り

に殺人などそう多いものでなく、實際は盗みが犯罪の六割を占めている。私は長く犯罪問題を手がけているが、まさに、石川や浜の真砂はつきるとも世に盗人の種はつきまじ、の感を深くすることが多い。

もちろん、どんな軽い盗みでも犯罪に変わりなく、犯罪をおかすのは異常な人間である。というのが世間の通念である。たしかにそのとおりである。しかし、泥棒にも三分の理あり、で、なかには面白いことをいう犯罪者もいる。

ある刑務所で会った盗人は、四十八歳の空巢の専門家で前科数犯の男であった。この男は十一歳の時、母親が死んで、代りに来た継母との折合いが悪く家を飛び出し、その後、ひたすら歪んだ道を走ってきた。しかし、向いあっているとどこかさとりすましたような所があって、自分にはある信念があるという。どんなことかと聞いてみると、自分は盗みはするにしてもすべてそれは物のある家からだけで、盗って可愛想なところからは絶対にだってこない、というのである。

それほど良心的な泥棒ならいっそ盗みはやめたらどうか、という、いやそれはできません、という。私はこうなる運命に生れついているのです。ワナと知りつつワナにかかるのです、と天を仰いで嘆息する。まるでわが身の業であるかのごとき口ぶりである。ただ残念なことには、業といいながら自分を外から見ただけで、内につきすすんで救いを求める力はない。

これなどは職業的な犯罪者だが、盗みといってもいろいろなタイプがある。それは老幼男女を問わない。小学生ぐらい

の子どもが面白半分、店先から友だちとまるでスポーツのように盗み競争をしている場合がある。そうかと思うと、何の不自由もない有名作家の夫人がデパートで万引を繰返してやめられないでいる場合もある。とくに最近目立つのは青少年の場合である。

女の子だと衣服や装身具などの身の廻りの品が多く、男の子だと遊びの資金ほしさに盗みをしているものが多い。しかも、必ずしも貧家の子女と限らず、中産階級に属するものが少なくない。つい先だっても講義に行っている女子の大学で、寮で仲間の物を盗む人がいるのですがどうでしょう、と寮長の学生から相談を受けた。

戦後の苦しい時代とちがって、今は物が豊富である。しかし、その豊富さがかえって慾望を刺激し、物慾をふくれ上らせるのである。ゆたかな社会はまた慾望をつくり出す社会でもある。満足される慾望が多ければ多いほど、新しく生れる慾望も多いのである。さきの万引夫人にしても、青少年の場合にしても、こうした慾望の仕組みにあやつられて自己を失った例といえよう。

二

これまでのべてきたのは、単純な物の盗みである。だが、

盗みは目に見える金銭や品物だけとは限らない。考えようによくと、空果の盗みなどはわずかの金品にすぎぬともいえる。役人が税金を無駄づかいするのも、デモの人たちが公園を紙くずでちらして清掃に大勢の人手や時間をかけさせるのも、国の財産を盗むものといえよう。現代の盗みは、注意して見るとさまざまな方向にひろがっている。

数年前、イギリスのリバプール近郊のある工場を見学したことがあるが、その工場長が日本の工場で自分の会社のパテントの一部が無断使用されているとこぼして、こちらが赤面したことがある。オランダの工芸館でもこれとよく似た経験をした。国外ばかりでなく、国内でも会社の間でパテントを盗んだとか、デザインの盗用をしたとかいうことをよく聞くが、これも盗みに変りはない。

今日大きな社会問題となっている公害や日照権も、ひろい眼で見れば、他人の人権を盗むものである。自分さえ良ければ、あるいは儲かりさえすれば、という考え方が根本にあって、他人への思いやりがない結果が、大勢の人びとの健康という貴重な人権を盗んでゆくのである。

ある女流作家は平然として他人の小説を剽窃した。一度やっただけでなく、その後にもまたやってさすがに非難をまねいた。某大学教授は権威を利用して、教え子の女性の身体を

盗んだ。もっともこの類いの盗みは、やがて世間にあらわれて罰を受けることになった。

これらほどあらわでなく、しかもひろい範囲にひろがっているのは、他人を陥し入れてその椅子を盗むような行為であろう。名誉への慾望や地位への慾望は、時には金銭慾に数倍するものである。それも露骨な欲望や謀略を表に出すのはよい方で、うわべは美しい言葉で覆い相手にはもっともらしい愛想顔を見せながら、内心では手段を弄して陥し入れようとしているのだから油断もすきもならぬ。他人の椅子への慾望のおもむくところ、まさに賢を嫉み善をそしり怨極におとし入る、であり、しかもこの盗みに失敗すると、はげしくもだえ苦しむ。それはみな、自らつくりだした憎しみや苦しみや愚かしさにほかならない。

盗みは物だけではないといったが、もっとも罪深いものは心の盗みである。甘言を用いて女性の美しい心を盗むのもそのひとつであろう。もちろん、この逆もある。さらに、他人の善意や誠実さを盗む場合もある。これらの盗みの罪深い点には、盗んでおきながらもそれを自ら盗みと意識しないところにある。現在私たちは、どれほどしばしばこうしたあやまちをおかしていることだろうか。

こうして考えてくると、盗みは必ずしも他人のことではなくなってくる。私自身もずいぶん盗みをやっているように思う。

学者の世界にも、他人の学説を盗むということがある。私これはやっていないつもりだが、しかし類似のことはやっているのではないか。縁あって私は大正大学の教壇に立ち、素朴な心の学生に接していたが、彼らが素朴であればあるほど私はある種の自己厭悪におそわれざるをえなかった。私が知ったかぶりで話しているのは、本当の私のものであろうか。他人のものを盗み、ただそれをつぎはぎして、まさに智



高

盗み……回教・ヒンドゥー教・仏教

佐藤良純

(大正大学助教授)

「泥棒した奴は、男でも女でもようしやなく両手を切り落してしまえ、みんな自分でかせいだ報いだよ。アッラーが見

者の振舞いをしていっているのではないか。

知識はまだ盗むことができるが、しかし本当の知恵は盗むことができない。言葉として盗んでも、一向に本当の自分のものにはならない。手にしたと思うが、あやまりであとかたもなく消えている。真実の知恵は自己を離れた客体としては盗み得ないものである。

立場をかえていえば、盗まれる側は一般に盗まれて口惜しいが、口惜しくないものもある。精神の世界では、むしろ盗まれるに値するものをもちたいものだ。この無形の財産は盗まれても減らない。盗みはおろかしいわざである。この財産の所有者はむしろ喜んで与え、しかも与えることによってふやしてさえいるのである。

せしめのためこらしめなさるのさ、なにしろアッラーは全能、全知だから、だが悪いことをした後でも、立派に改悛

して、そのつぐないをする者には、そりやアッラーだつて（ゆるしの）御顔を向けてくださるさ。なにしろアッラーは何でもおゆるしになる情深いお方だからな。」（コーラン第五章四二・四三節・井筒俊彦訳・岩波文庫）。

これは、砂漠の宗教といわれ、「目には目を、歯には歯を」という有名な復讐の論理をその生活倫理・戦いの倫理とし、「片手に剣、片手にコーラン」をふりかざしてアラビア大陸を席卷した回教徒の信奉するイスラーム法の窃盗罪の根拠となっているコーランの一節である。そしてこれに基いて、窃盗犯人の初犯は右手が切断され、再犯は左足、三犯は左手、四犯は右足がそれぞれ切断されるとする、いわゆる手足の交互切断刑が定められるようになる。ただし、窃盗罪が成立するのは、窃盗の対象物が正しく保管されている場合、その対象物が一定以上の価値をもつものである場合に限られ、例えばある品物が、誰でも持ち去ることのできるような状態に放置されていたり、その価値が一定以下のものの場合には罪が成立しないとされる。又、盗人が未成年者、精神障害者の場合、他人に強制されて行った窃盗、直系の血族から窃盗を働いた場合などはハッド刑と称するコーランに規定されている変更できない刑の適用をまぬがれるという定めもある。コーランにはこの外、辻強盗に対する刑罰も記されているが、い

ずれにせよイスラーム法に見られる窃盗に対する罰は直接的で、非常に苛酷なものである。

— ○ — ○ — ○ —

「我々は盗賊に苦しめらるるから、彼等を懲戒する。その結果盗賊が遠ざかったとすれば、それは彼らが他の人々を襲うていることである。自己以外の受難者も亦等しく人間であり、異なる相を持つ我々自身である。かく循環論の内に迷わねばならぬ。一方盗賊は、盗みを職業なりと考えるから盗難はますます増加する。結局盗賊を懲戒するよりも寛恕するのがよいことに気づくのである。」（ガンディー聖書、第一部第二章、博愛、エルベール編、蒲穆訳、岩波文庫）。

インド独立の父ガンディーの言葉である。ガンディーは続けていう。「盗人は他人の物を盗み得るのみならず自己の物を盗むことができる。例えば父親が、子供にないしよで物を食べる如きはそれである。—— なんであろうと許可なくして他人の物を使用するのは盗みである、所有者がそれを知っておっても同様である。何人にも属せないとする物を使用するのも盗みである。路上に見つけた物は、政府か地方庁の所有である」。ガンディーは更に続ける。「真の必要なくして他人の物を使用するのは、たとえ所有者の承諾があっても盗みである。必要なくしては他から一物をも受けてはならない」。

「既に考察したような盗みを物質盗、又は対他盗という。心の内で他人の物を希望し、或いは欲しがってこれを眺めることも亦同様盗みである。品物と同様に、他人の創意を盗むこともできる。立派な創意の主唱者とか、或いは示唆者であるとか、利己的に主張しても事実ならざるなれば、それは創意の盗みである。世界の歴史で多くの賢者はこの種盗みの犯人である。」(同上)。

盗人はこらしめるより許すのがよい、そして盗みとは具体的な品物を取ること以外に、心を盗むこともあるので厳につしまねばならない、これがガンディーの立場であった。

— ○ — ○ — ○ —

「何れの比丘といえども、若し村落、或はアーランニヤより、盗心を以て与えられざるものを取らば、そは是の如き盗み方にて即ち諸王盗人を捕えて『汝は盗人なり、汝は愚者なり、汝は痴者なり、汝は盗賊なり』とて或は殺し、或は縛し、或は追放す。比丘、是の如く盗取をなさば、是亦、波羅夷にして共住すべからざるものなり」。

パーリ律蔵、經分別、第二波羅夷の言葉である。律蔵は更に説明している。「与えられざるもの」とは、「すべて施与せられざるもの、捨与せられざるもの、放棄せられざるもの、守護せらるるもの、自己のものとして所有せらるるもの」で

あり、これらを盗心をもって奪い、取り去り、盗むならば、王は盗人を捕え、手、足、鞭、棒、杖、拷問によって殺したり、縄縛によって縛し、人の監視のもとにいたり、村や、町から追放したりする。若し比丘が盗みをした場合には、あたかも枝より落ちた枯葉が再び緑りなことができぬ如くこの者は、沙門、釈子ではなく、同一の羯磨、同一の説戒で、共に学修することはできない」と。

仏教において、殺、盗、淫、妄、飲酒の五を禁ずる五戒が、出家、在家を問わず倫理的道德規範の第一であったことはいうまでもない。律蔵には盗みについての詳細な因縁談、規程などが見られるが、この場合、重要なことは、「盗みの心をもって」「与えられざるものを取る」ということの様に思える。「心」、意が盗みの方向に向って動き出した時、すでに盗みはなされている、或る品物を奪い取ることはもとよりそこになにげなく置かれていた所有者のわからないものでも、与えられないものを取る時は盗みとなる。この考え方は、冒頭にあげた、イスラーム法の考え方とはかなりの距離がある。「真の必要なくして他人の物を使用するのは、たとえ所有者の承諾があっても盗みである」というガンディーの言葉こそ現代に必要なものではないであらうか。



歐米宗教見聞録 第三回

開教寺院

安居 香山

(大正大学教授)

開教寺院というのは、浄土宗に關して言えば、米国本土、

ハワイ、そしてブラジルのサンパウロにある日伯寺について
言える。沖繩にも袋中寺というのがあって、戦後なくなり、
今また再建中であるが、沖繩が已に日本本土になつてしまつ
た今日、開教寺院とは言えまい。そのようにいわれるのは、
開拓移民の中に入つて、仏教を宣教することからであらう。

この中、私が廻つて来たのは、北米とハワイの開教寺院で
ある。北米と言っても、ロスアンゼルスにある「浄土宗北米
別院」というのが唯一のもので、本土での開教は微々たる動
きと言える。しかし、ロスアンゼルスでは、立派な寺院もあ

り、その活躍も古い。

休日などが重なつた為、野崎靈海総長にも思ふように連絡
がとれず、僅かにロスを去る当日の朝、せめて参拝だけでも
と、タクシーを走らせた。空港への途中でもあつたので幸い
であつたが、立派な二階建ての煉瓦造りの北米別院にたどり
ついた。しかし、九時前であつたので、開教師方は、未だ登
院されていなかった。後で電話で空港から野崎総長に聞いて
分つたのであるが、その裏に開教師の社宅があつたのであ
る。私はそれも知らず、止むを得ず名刺を入れて、玄関で礼
拝しておいたが、中はさぞ広く、そして立派に裝飾してある



ロスアンゼルス北米別院

のであろう。西海岸有数の大都市だけに、日本人も多く、それだけに、開教活動も忙しいようである。

北米と言えば、この外にシカゴに三人の開教師がおられた。無垢品在真、高橋俊浄、田中一男の三人の開教師である。この中

無垢品師

は、已に二

十年近くも

の活躍で、

特にラジオ

を通じての

それは、有

名である。

この事につ

いては、次

の号に紹介

する事とす

るが、特に

寺院らしい

構えはして

いなかっ



シカゴハバいの教会

た。自宅の一室を仏間にして法要等が行われていた。師の場合は、むしろ在住全日本人を相手にした開教とでもいうべきもので、シカゴには一万八千人程日本人がいるらしい。不案内で恐ろしいといわれるシカゴでは、この三人の開教師のおかげで、大変わかった。

シカゴで印象に残ったのは、ハワイ教の寺院であった。イスラム教シーア派の系統に属する宗教であるが、あらゆる宗教を包括するような宗教で、世界の三大宗教はもとより、いかなる宗教も受け入れた世界宗教教とでもいうものである。

サンフランシスコ金光教教会



信者が建てたというこの大伽藍も、中は空洞が偶像は一切置かず、マイクの前に立つた司会者が、すべてを仕切るという。新興宗教ではあるが、最近とくに発展しているらしい。

シカゴには、日本から日蓮・本願寺・真言・禅などの諸宗派や、天理教、生長の家、さては天照大神教などの開教寺院や神社神道があって、盛んに開教しているようであるが、それらの寺院に参拝するチャンスは無かった。たまたま、サン

フランシスコで曹洞宗の禅寺に行く途中、金光教の開教殿があったが、仲々すばらしいもので、横には会館もつくられて、催物が為されていた。神社風のこの洋館は、いかにもモダンで、新興宗教らしい意気込みが見られた。既成仏教なども、その歴史は永いが、こうした宗教の進出に、大いに刺激を受けて、頑張ってもらねばと、思われる面もあった。

帰途ハワイに寄ったのであるが、ここは何と言っても、その歴史も古く、日本人も多いだけに、開教寺院も数多い。開教も、日本人の移民が入った一八八五年（明治一八年）に引



ホノルル浄土宗別院

き続くように、一八八七年には、開教師が入り込んでおり、ハワイ全島には、浄土宗だけでも十六ヶ寺に及んでいる。その中心は、なんとと言っても、ホノルルの浄土宗別院で、藤花総長夫妻を始め、河合・原・工藤の各開教師を中心として、寧ろ日のない活躍が続けられている。最近、法然上人の青年求道像も建立され、ハワイ浄土宗の中心として、その偉容を誇っている。

ホノルルには浄土宗ばかりでなく、本願寺系、曹洞宗その他、各宗派の別院があり、どれも立派である。最近天台宗も、



カフルイ浄土院

新たに進出してきて、文化活動を中心として、開教活動を始め注目されている。開教の中心拠点となるだけに、寺院は立派に整備されている。

勿論ホノルルのように、人口も多く、従って信徒数も多い開教寺院は、その経営維持も楽で、建物も立派であるが、他島の小寺院にいくと、話はそれ程簡単でない。私の親友である新保義道開教師がいるマウイ島カフルイの浄土院などは、田舎町にふさわしい瀟洒な建物であるが、お世辞にも豪華とは言えない。それでも、砂糖を製造する田舎町にふさわしい、気持ちのよい寺院が、広い原の中に建っている。なんでもこの寺は、もとブーネネという所にあつたのであるが、砂糖工場が移転するため、その住民が移転することとなり、必然、この寺もその住民と共に移転せざるを得なくなり、新保教師が、苦辛惨憺の末に建てたものという。日本の寺院と違い、信徒にばかり頼っておれぬ開教寺院は、開教師の努力によって、始めて建立が可能となるのである。この瀟洒な建物にも、血と汗の結晶があると思うと、うたた感慨一入なものがあるのである。

五日間滞在をして、長路の疲れをいやしている或る日、新保師は、思い出のブーネネの寺院跡に案内してくれた。門と扉だけは、その残骸を止めていたが、うたた荒涼としたつわ

ブーネネ浄土院旧跡



カフルイ浄土院本堂



あり、キリスト教会式な固定椅子が並んでいた。日曜には、午前ここで礼拝が行われ、又法要等も勿論ここで行われる。本堂の飾りも豪華ではないが、厨子や須弥壇もしつらえられ、洋式の中にも、日本的なものが、うまく生かされている。ホノルルなどの別院は、立派であるが、町寺としてはこれで充分で、開教活動に適した大きさと言える。

裏には集会所、調理場、それに日本語学校の教室などもあり、日本の寺院などとは比較にならぬ広い敷地内に、ゆったり建物が建っている。同じ敷地内に、開教師の住宅もあり、これも大して大きなものでないが、平屋のサッパリしたものである。私もこの中の一室で、気持ちよい冬の常夏の五日間を、のんびり過したのであるが、又この六月には、煎茶道の連中とこの地を訪れ、この本堂の仏前で献茶式をする予定で今からその日の来るのを心待ちに待っている。

ものどもの夢の跡の感があったが、苦勞した新保夫妻には、去り難い感慨があるようで、しばしあちらこちらと見て廻っていた。開教ということの尊さを、この苦勞話と共に私はしみじみと味わった。

新しい本堂は、決して広くはないが、百人は入れる広さで

四季の書



癸丑暮春蘭亭曲水の宴 〔其二〕

林

錦洞

(書道家)

中国の書聖王羲之という人が会稽の蘭亭で禊事を修し、その時一諸の文人達が作った詩に序文を書いて、世にこれを蘭亭序と言って書道の方では大変尊ばれていることはご存知の方は多いと思う。この蘭亭の会合が、実は永和九年癸丑の歳で、一昨年四十八年の癸丑が丁度二十八回目千六百二十年目に当ると言うので書道界では色々な催しが行われた。この蘭亭序の最初に「永和九年歳在癸丑暮春之初」とあるように三月三日であった。偶々本誌より依頼されて季節毎に何か書に関係した話をと言うことなので、丁度陰暦三月時機もよく、書では最も尊敬されてる王羲之の蘭亭なら一番よからうと思ひ話をすすめてみたいと思います。

余談で恐縮ですが、今これをカナダのバンクと言う所で書いてます。カナダバスイフイック航空系列が勧進元になり一月半ばかり日本祭りが開かれてまして、これに書の展示や席上揮毫をして旅を続けており、急なことでこの稿をまとめるわけです。資料も不足で記憶違いもあると思いますがその点ご了承を願っておきます。

王羲之の書を日本にもたらしたのは唐招提寺の鑑真和尚で、ついで文献では東大寺献物帳に記されてある大小王珍宝帳があります。当時日本では「羲之」と書いて「てし」即ち書き手を意味しましたから、それ程に羲之の書が日本では尊重され研究されてました。光明皇后の楽毅論などを初めとして、平安時代上代様の書道発達に

は最も大切な影響を持っています。何と言っても書は王羲之に始まり王羲之に終ると言われたもので、近年は明清を中心とした書風だとか北碑秦漢の研究も盛んですが、やはり暗流の趣くところ、自ら羲之の卓抜した才腕に落着くようだと考えている此頃です。

王羲之は王曠の子で瑯邪臨沂に生まれました（三二一～三七九）。字は逸少・子の猷之もまた著名書家として二王とか大小王とか称されています。宮中に出仕して右軍將軍とか会稽内史の官職につき、このため右將軍・王右軍と呼ばれました。張芝という人は池に向って書を習い、そのため池の水が墨くなる程勉強したが、羲之もまた自らこれに次ぐと言っているように、大変な勉強家でした。生来驚鳥が好きで、ある時驚鳥を飼っている老婆に売ってくれと言ったところ、翌日食べるのが好きと感通して料理した驚鳥を出されて悲しみ歎いたと言うことです。李白だったかの詩にも道德経を写して驚に換えたところあり、そんなところから書と驚鳥とは縁が深くなったようです。

さて本題の蘭亭についてももう少し話を進めましょう。王羲之はこの年の三月三日に、孫統などの名家や子供の

凝之など総勢四十一人で会稽の蘭亭に集まった。祓禊の礼を修した後夫々に詩を作ったが、一觴一詠して幽情をのべるに足るだけの環境や気分が盛り上って来た。所謂蘭亭曲水の宴である。曲りくねった流れに盃をうかべ詩を作っては一杯、誠に幽雅である。日本でも奈良平安の上流社会には早くこの曲水の宴のことが伝わり、今日でも古式豊かにとり行なう神社もあります。

羲之はこうして作られた詩に鼠の筆で序文を書いたと言われ、凡そ三三四字、この中に「之」の字が二十幾つかあるが、一つとして同じ形がない程変化の妙を尽し、羲之自身浄書してみたが、何故書いてもこの時の創作にまさるものが、遂に出来なかったと言う。如何に曲水の宴が身心共に暢快であったか。名人芸とは何事であれ、平生の力が貯わえられ調子のよい時は一瞬に爆発するものなのでしょう。書聖と言われる羲之が満足した程の出来栄えだから、千六百年後の今日になって尚その名声は高く初学者は勿論、研究者にも必要なものとなっております。こうして羲之はこの蘭亭を子々孫々に伝えたが、残念なことに今日この真蹟は見る事が出来ません。次回はこのことにまつわるドラマチックな話から始めます。



に	こ
聞	法
く	語

法然上人の人と生活 (四)

赤子念仏がよきなり

宝田正道

法然上人の説かれた念仏は、『一枚起請文』にも述べられているように、「観念」の念仏でも「念の心を悟りて申す」念仏でもない。仕方本願の念仏である。この念仏には、「独り立ち」のできる能力がおのずから備わっている。源頼朝の妻政子へ返された御文の中でも、だから「只六字をとらふるばかりに一切はおさまりて候也」(鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事)と述べておられる。つまり、次の法語のごとくである。

本願の念仏には、ひとりだちをせさせて、すけをささぬなり。……ただむまれつきのまま

にて念仏する人を、念仏にすけささぬとは云う也。

(常に仰せられける御詞——『念仏問答集』)

この「すけをささぬ」念仏ということが、源信や永観その他の先輩諸師の勧められた念仏と違うところである。それには、智恵も道心も持戒も慈悲も一切助けとして要らぬ独立の強さがある。いわば一本立ちである。上人はこれを「むまれつきのまま」で申せ、といわれているのである。『一言芳談』には、明禪法印の言葉として、これが、「赤子念仏がよきなり」と出ている。身をまか

せて仏をたのむ心を説明するのには、まことに妙をえたズバリの表現で快い。明禪は参議成頼の息として生れ、顯密の棟梁、山門の英傑と謳われた人であるが、道心を発して隠遁の思い深く、毘沙門堂に籠居して最初は法然上人の念仏の興行をそねみそしていた。ところが、上人の滅後、上人の高弟白川の法蓮芳信空から『選択集』を送られ、はじめて浄土の宗義を得、称名の功德を知った。そして信仰のあまり、改悔の心を発し、『選択集』を書写してその袖に「源空上人の選択集は、末代念仏行者の目足なり」と書きつけたという(勅修御伝四十)。この人が、「赤子念仏がよきなり」と言っていたのけたのも、法然上人の「うまれつきのまま」の精神を遵守しようとしたからに他ならない。同じ『一言芳談』に、西山の流れをくむ松蔭の顯性房という人が、「小児の母をたのむは、まったく其故をしらず。ただたのもしき心ある也。名号を信敬せんことかくのごとし」と言っているが、これは、幼児の如き純粹な疑いのない心で申す「赤子念仏」の不思議さを説いたものである。

思えば赤ん坊はどうぶで無邪気なものはない。これは皮膚の色の赤さから名づけられたというよりも、黒人と白人とを問わず「赤」子とよぶように、心が純情無垢で

濁世の穢れを知らぬありさまを指したものである。手に何ももっていない「赤手」とか、まごころの「赤心」に使うと同じ意味の「赤」である。

法然上人は、次の法語でも、「生まれつきのまま」を強調しておられる。

念仏の機は、ただ生まれつきのままにて、念仏をば申すなり。……ただこざかしく機の沙汰をばせずして、ねんごろに念仏だにも申せば、みなことごとく往生するなり。

(禪勝房に示される御詞——『勅修御伝』四十五)

ところが、おもしろいことに、同じ趣旨を上人門下の逸材の一人、西山の善恵房証空は、自力根性の人に向って常に「白木の念仏」という言葉で勧めている。その意味は、自力の人は念仏をいろうどる向きがあるが、その「いろうどり」が迷いであり、曲者である、と説くのである。あるいは大乘の悟り、あるいは深い領解、あるいは戒律、あるいは身心のととのい、その他、なんでも「いろうどり」をつけて喜んでるのが彼らの念仏である。しかし、浄土宗の念仏、つまり「大経の法滅百歳の念仏、親経の下三品の念仏はなにのいろうどりもなき、白木の念

仏なり。本願の文の中の至心信樂を、称我名号と釈し給へるも、白木になりかへる心なり」（勅修御伝四十七）である。

この「白木の念仏」の「白木」は、「素人」や「素面」の「しろ」で、清浄無垢な「素木」を意味する。日本人は昔から「白」を尊じ、それを高く評価してきた。白衣や白紙はそれ自身汚れない清潔さを表わす。祝いの席の引出物には白扇が用いられ、良寛の「白扇」の詩には白無地の中に万有を藏した無形の美が清らかに歌われている。絵画でも墨水一刷に余白の美を残すことが伝統的に尊ばれ、文学でも描写の空虚を尊ぶ「白紙の文学」がもてはやされた。その觀念が職業に現れては、僧侶や神官の白衣・白足袋姿となり、行者や死人も神格化されて白衣の行人として描かれた。白無垢姿の花嫁はまた、純潔の処女をあらわす。戦争の際の白旗は、無抵抗の恭順を示し、囲碁の白石、相撲や犯人の白星はいずれも黒に對する優位と漂白を象徴しているのである。

このように、「白」はすべて何物をも加工しない、生のままの姿を示す場合に多く用いられた。それはペンキやクレオンなどで「いろどり」をつけた「白」ではなく素材で汚れていない素焼さのものをいう。伊勢神宮の白

木造りや白木の観音、白木の墓標などもそれである。

「白木の念仏」は、このように、人工的な着色や技巧を一切施さない、雑念なき念仏という意味に他ならない。とすると、これは先の「赤子念仏」と全く同じように、法然上人のいわゆる「うまれつきのまま」の念仏を別の言葉で敷衍したものである、ということが理解できるであらう。

白と赤は本来同格である。運動会の白組と赤組、おひな祭の菱餅の白と赤、そして紅白歌合戦の白と紅。いずれもかりに性別にわけてあてはめてはいるものの、実質は甲乙平等で、その差がつけにくいものの場合に使われる。平家の赤旗に對して源氏が白旗を用いたのも、對等の意識からであらう。いずれにせよ、白も赤も、優劣なく、生れたままの清純さを表わす点で変りはない。その点に着眼して、「赤子念仏」といい、「白木の念仏」といった明禪と証空の思いつきは、師匠法然上人の意図を巧みに生かしたものととして、ともに高く評価すべきであらう。

要するに、法然上人の念仏には、技巧も形式も一切不用なのである。次の法語にそれが表わされている。

念仏申すにはまたく別の様なし。ただ申せば極楽へむまると知りて、心をいたして申せばまいるなり。

(常に仰せられける御詞——『白川消息』)

念仏は様なきを様とす。ただひらに仏語を信じて念仏すれば往生するなり。

(諸人勸化の御詞——『勅修御伝』二十一)

ここでいう「様」とは、技巧や形式のほかに色彩という意味をこめて解釈したほうが、わかりやすいかもしれない。つまり、前記の「いろどり」である。法然仏教の特色は、いろどりのない、生れつきのままの赤子念仏、白木の念仏だ、ということである。

われわれは、とかく「いろどり」の世界に生きている。一人前の社会人となって浮世の風にさらされると、だれでも一応は世間態ということを気にし、それにしぼられて右往左往することが多い。たとえば、友人に招かれただけで、すぐ手ぶらでは悪いとか、服装をどうしようか、などという考えが先走ってしまう。真心のつきあいのない、形式にとらわれて純粋な魂の交流を妨げられ

てしまうのである。念仏を申すにしても、「赤子念仏がよきなり」と聞くと、今さら大の男が赤ん坊などに戻れるか、とすぐ理屈っぽく反発する気配を見せる。とるに足らぬ教養や知識、見栄などがそうさせるのかもしれない。みんなつまらぬ「いろどり」である。もっと素直になれないものか。法然上人は、「一文不知の愚鈍の身」になることを強調せられたが、現代人の多くは、せっかく大学まで出たのに、今になって無学になれ、というのはひどすぎる。第一それは無理というものだ、と考えるかもしれない。しかし、これは何も無学になれとむずかしい注文を強いているのではなく、仏智に比べればごくごくわずかばかりの学問や知恵才覚を、さも大事そうに偉そうに天狗面して威張っている、その高慢な愚かさを知るのがよい、という意味である。そう思えば、なるほどわれわれは、赤ん坊に等しいほど無智なんだな、と気がつくであろう。そこが大切なところである。そう気がついて初めて「赤子念仏」の生れる素地ができるのである。いわゆる「いろどり」もコロリと落ちてしまうわけである。

要するに結論は次の法語に明らかである。

念仏の義を深く云ふ事は、還って浅き事なり。義は深からずとも、欣求だにも深くば、一定往生はしてん。

『一言芳談』

われわれは、とかく念仏というものについて、その義理を深く考えすぎるようである。学者が念仏の意義を解剖して古来の先徳の論釈をあこれとやかくひねくりまわすのは勝手であるが、念仏行者としては、そんなことに耳をかす必要はない。ただ、極楽往生の願心さえ深くすればそれでよい、というのである。現代人として特に心に銘記すべきお言葉ではなからうか。

ハガキでひと言

陽春に想う

桑原法道

(山口県柳井市浄慶寺住職)

開宗八〇一年より浄土宗は一体何をすべきか、愚問愚答して見ました。

第一に、新しい布教活動、例えば器機を各センターに備えつけるとか……

第二に団地布教を推進すべき時と思います。

第三に、宗門の各大学にボーイ・ガールスカウトの団体結成と、指導講習をやって欲しい。私がB・Sに入ったのも仏専で健児用に、ほんの二、三ヶ月入団したのが、今もスカウト活動を続けているわけです。

戦前は浄土宗はスカウト活動ではトップクラスと聞いています。今はなかなかトップクラスとはいえません。ご協力をお願いします。

尚最後に宗門には、二足のわらじをはいている住職も多いと思います。時にはそれらの人々の参加できるチャンスを与えて下されば幸甚と思います。



徳本行者真像（来迎寺安置）

念仏行者

徳本上人の番号石

嵐 瑞 澂

（兵庫県多紀郡来迎寺住職
神戸大兵庫史学会評議員）

日本各地に立っている番号石の中で、徳本行者の番号石は数多く、また全国的に分布しているものはない。兵庫県内にかぎってみても、県下いたるところに徳本直筆の文字を石に彫った、味わい深い書体の「南無阿弥陀仏」の六字の番号石を見ることができ。

明石市の浜光明寺、東灘住吉町赤塚山の徳本寺に立っているものは高さ数mに及ぶ立派なものであるが、一般には、その大きさは大体縦1.5m×2m、横1m×1.5m程度のもので、自然石が多い。

南紀生まれの徳本が兵庫県に教化に來たのは、住吉村（東灘区住吉町）に住んでいた篤

信家の吉田道可、喜平次道因父子の懇請によつて、同村柵内の阿弥陀寺に留錫して専修別時念仏を執行したのに始まる。

喜平次はその当時持高二一九石余の豪農で、下男下女三十二人を使って酒造業をも営み、大阪安治川の outlet に船十二隻を持って、灘の銘酒や諸荷物を江戸に積み下ろす問屋を兼ねていた。

彼は、当時徳本が有田郡須谷山頂（紀勢本線紀伊宮原駅東2kmの岩室山二七四m）の巖で練行中に面謁して深く帰依し、その後寛政九年（一七九七）に住吉村に招き、更に翌年には赤塚山に庵を建てて行者に奉った。現在

の徳本寺がそれである。

浜光明寺は、宗祖法然上人の六百年の遠忌に際し、檀越の名村善三郎愚仙が文化七年（一八一〇）に徳本を招いて報恩の別時念仏会を執行したのである。

このように徳本が直接留錫して教化にあたった寺院やその周辺の地域の外に、最近イタイタイ病でマス・コミで問題になっている、江戸時代の釜山町生野町附近、難病人が治療のため集まる有馬や、氷上郡国領などの温泉郷、疲れた旅人の憩いの峠の茶屋、川越えの危険な場所や、その他投身自殺者の絶えない湖沼の畔には、必ずといってよいほど徳

本の名号石が立てられている。

それらの地域には古くから念仏講があり、これらの講頭の連中が噂を聞いて、練行中の徳本に面会し請待の願いを出すとともに、大字名号を書いてもらって帰り、その名号を中心に改めてはっきりした目的を持った念仏講を組織し、末長く徳本の厚德を名号石を立てることによって仰いでいったと考えられる。

当時の庶民に熱烈な信仰心をうえつけ、生き仏とあがめられた徳本行者とはいかなる僧か、一般にはあまり知られていない。

江戸伝通院内一行院（文京区小石川）で六十一か年の生涯を終えた徳本は、浄土宗の宗侶としては異端者で、正規の檀林での修学研修をせず、彈誓や澄禪の先徳がそうであったように、独自の修行、自行策励の荒行者であった。

行者の全貌は、慶応三年刊の福田行誠編の三卷本徳本行者伝と、近く出版される六十巻本行者伝によって明らかであるが、内容的に行者晩年に偏するきらいがある。

最近、東北大学所蔵の、故狩野享吉博士収集の「徳本道人略由來記」を見ることができ

た。この由來記は、加賀

の国の粟山という人が、宗祖法然上人の御遺跡二五か所を巡拝中、噂を聞いて、寛政五年行者三十六歳の時に、直接面謁して十念を授かり、大名号を頂いたことを記した見聞記で、当時の行者の姿を信者側の立場から記述した珍しく貴重な写本である。今これによって、徳本の出生や修行の

状態を略述することにする。

徳本は、宝暦八年（一七五八）和歌山県目高郡川辺町小熊（一般には日高町志賀久志）の豪農徳右衛門の子として生まれた。徳右衛門は数十人の下男を使う農家で何不自由ない身であったが、五十五歳になっても子供がなかった。それ故神仏に祈願を続けていたが、その効あつてか翌年男子が授かった。これが後の徳本である。

徳太郎と名付け寵愛して育てていたが、徳太郎は天性知恵すぐれ、万事に堅きこと大人



宗祖御影（題は徳本行者一收起請文）

も及ばぬことが多く、魚肉類は一切口にしなかった。七歳の二月十五日朝西方に向かつて手を合わせ、南無阿彌陀仏と唱え始めてより晝夜しばらくもやむことなく念仏ばかり唱え出したので、両親をはじめ近所の人々は大いにあきれ果てて、種々意見をし、脅し、すかし、なだめるなどしたが一向に聞き入れず、柿桃梨など果物のみを食して念仏ばかり申していた。この地方には真言・禪宗のみで、念仏を申す人もいないのにと人々は不思議がっていた。

このことを聞いた母方の伯父で、かつては

兵庫県氷上郡青垣町
佐治の路傍の名号石



大寺の住職をし今は老年に及んで、日高村の庵に隠居していた真言宗の道輝和尚は徳太郎を引き取って、一人前の僧に養成しようとして名を徳本と改め訓育につとめた。三か年間懇切に指導はしたが、念仏ばかり唱えて他のことは一切覚えないので、仕方なく親元に帰した。

その後、徳本は家事を手伝っていたが、ある日のこと出奔して日高山奥、千津川山の岩窟にこもって、正直の如来を拝せんものと求道専修念仏に入った。六か年間の荒行を行って念仏を深めて行き、ついに念仏三昧、三昧

発得の境地に到達し、すべてが念仏に統一され、全人格が南無阿弥陀仏で輝くにいった。

時に寛政三年、徳本三十四歳の時のことである。その間両の股腫ただれ、悪汁流出すること湧が如し、皮肉の引破れはあたかも栗研の口のようにあったと云う。

その後萩原村を経て塩津山の庵に移って、念仏を励むとともに、はじめて庶民の教化にあたった。

寛政五年徳本に面謁した栗山は、そのころの様子を次のように記している。

塩津の庵は藁ぶきで、間口七間奥行十五間程の仮小屋で、見付は一段高くなって板張、外側名土間で粗末な藁をひきしめてある。

飯堂の中は参詣人一杯で、皆同音念仏をしていた。徳本行者は年齢三十五、六歳で、

髪は総髪で膝の上まで下がり、髭は八寸ばかりのび、身体は昼夜夏冬とも黒布で七条袈裟をかけ、食事は五穀や火をあてたものは食せず、木の実・空(蚕)豆類である。大きなドスのきいた声で十念を唱え、鉦を打ち、声を限り大音にて参詣人一同同音し、線香一本切念仏を唱え、線香燃立つと又十念を出されて交替した。参詣人に長さ二寸五分、横一寸五分の名号札を一切百枚宛授与し、夜明けとともににはじまり日暮れまで続いたと記している。この徳本の、迫力ある力強い六字分明の念仏による深甚なる宗教体験は神秘的な力があり、庶民にアビールし、生き仏とあがめられ、各地に名号石が立てられるようになったものと思う。

私の住職する来迎寺には行者康存の文化十一年十二月、京四条にすめる仏匠、西田立慶同立康が深秘をもって彫刻した真像(等身の三分の二大、名号を題した御肖像画、御名号各一軸、宗祖の御影に徳本が一枚起請文を書かれた板木を安置している。

一枚起請文をご希望のかたは印施していただきますのでお申し込み下さい。

心の履歴書 〆二〇



川内 知光

(京都市西賀茂西方寺住職)

相談の寺

ある夜、タクシーに乗って西賀茂西方寺まで帰って来ましたが、お寺の近くまで来てからタクシーの運転手の人が、「このお寺は相談をうけられるお寺ですね」と言われたのにはびっくりいたしました。

一年の間に十数人の見知らぬ人が、人から聞いたと言って相談に見えますが、私は常に開口一番「私は喜んで相談に乗

らせて頂きます。私は相談は私の仕事だと思っております。然し商売とは思っておりません。従ってお礼は一切頂きません。お礼を頂くと何とか解決しなければならず、力及ばない場合でも自分を偽ってでも心にならない答えをしなければなりません。之は私は一種の欺偽行為だと思えます。私は罪は犯したくありませんので、分らぬことは分りませんと申しますから、それだけは了解して下さい」と言ってその人の心情、現在の環境などを三十分でも一時間でも、長い時は四時間半も聞いてあげましたが、今迄のところ、分りません勘弁して下さいと言って帰って貰った人は幸にも一人もありません。玄関を出られる時、「どうでした」と改めてお聞きすることにして

いますが、殆んどの人が「お寺に入ってくる時は暗い気持ちでしたが今は明るい気分です、有難うございます」と帰って行かれます。

雑誌大法輪昭和四十九年九月号に次の一例「自殺志望青年との対話」を書きましたが、之はその相談の一つです。

我がままなおばさん

京都府下に住職をしている和尚さんから「私の手にはおえないので私に力になって欲しいと色々の事情を書いた長文の手紙を頂きました。若い者もあなたの言う事なら聞くように思いますから一つ力になって上げて下さい」と言うのです。

それ以前にK伯母と街で偶然に会った時、之は仏様の引合わせだ一寸家に寄って相談に乗って下さいと言うので祇園花見小路の遊廓街の中にあるお茶屋に寄せて貰ったことがあります。

商売は姉妹二人でやっていたのですが、姉は二年程前に死亡しているのですが、商売は芸妓舞妓の不足でお客があっても芸者の来ない時もあり、商売は仲々思わしく行かなかった

のです。そして商売は殆んど妹のKがやっています。その家なども妹の所有だったのです。姉に一人男の子Yがあつて薬剤師の免状も持っているのですが、その薬剤の仕事をしないで、神戸で別商売をしていたのが事業に失敗して京都に帰ってくるようになったのですが、今度京都市寺田に家を買うことになったので、伯母さんも一人で淋しいだろうし、私も家を買う金も出して欲しいので一緒に住んでみたらどうですか、と言うので、実はこの家を三千五百万円で売ることにしたのです。

「それは良い事だと思う、あなたも大分年をとって一人暮らしは淋しいだろうし、Yもあなたが子供のように可愛がっていたことだし私は之が自然で大賛成です。但し言っておきますが世間の色々の話を聞いていますがお金はなるべく沢山出さぬようにしなさいよ。」

「それが殆んど出してしまつて三百五十万円しか残っていないのです。」

「もう話が定まつたら仕方がありませんがその残ったお金は絶対に放してはいけませんよ。電力株か何か買ってあげば配当であなたの小遣錢位はあるでしょう」と言つて分れたことがあるのです。

そして一家城陽市に移つて、甥は友見と共同で繊維関係の

事業を始めたのですが、之も又失敗いたしましたして折角買った住宅も抵当に入っていて出て行かねばならず隣村の借家に転宅したのですが、伯母Kはその時持っていた残金も皆出してしまつて、全く法一文になつてしまつたのです。

ところが予想した通りI和尚さんの手紙のように家庭が円満に行っていないのです。

私は家庭のいざこざの事件には不得意なのですが、例えば甥の嫁が「伯母さん御飯食べて下さい」と一人で食事は決して一家中揃つて食べないのです。

下に降りてお膳につくと他の者のお菜だけが出てあるのです。世に食べ物のうらみは恐ろしいと言ふことがあります。が、余り気分の良いものではありません。

大体こう言つた生活が毎日続いているのですが、月に一回位は甥の嫁は「伯母さん養老院に行つたらどうです。同じような老人が沢山いて話相手があつてよろしいですよ」と言うらしいのです。その他色々の不愉快な事が日々続いているようです。

毎月六日にお詣せられるI和尚さんに話をするのでないかと思ひますが、手に余つて私に振つて来られたのだと思ひます。

それから一カ月程前に京都市内の某寺にて法事がありまし

てK伯母に会うことが出来たのです。二時間程色々詳しく話を聞かされたのですが、「それでは私が甥Yに会つて話してあげましょう」と申しましたら、「甥は和尚さんの言うことなら良く聞いてくれるように思うのですが、甥には相手がいます。それが私が和尚さんに頼んだと言ふことになる」と、反つてあとが恐ろしいように思うのです。甥は事業に失敗してから嫁の実家（京都にては少し名の通つた貴金属店の）の貴金店の外交をしているのです。それからは一層嫁に頭が上らなくなつたように思われますので困つてゐるのです。

「それでは私は聞いた以上じつと傍観してゐられない性質ですが、私は一体あなたにどうしてあげたら良いのです。I和尚さんも私が仲に入るより外に道が無いようなお手紙を頂いているのですが私は若嫁さんには一度も会つたことはありませんし困つたことです」

それから暫らく歓談をしていました。Kは私の母の偉かつた私の知らないことを話して呉れたりしたのですが、話は本題では少しも進展しそうにありません。

話している間に不図私は

「Kさんこう言うことにしたらどうですか、あなたは之ではもう辛抱できない、川に身を投げようか、首を吊ろうかと

思った時、私に電話下さい、そうしたらI和尚さんと連絡してY夫妻に会いましょう。あなたがお金を出したことは言うか言わないかその時の空気にありますが、子供の時からあなたが自分の子供以上に可愛がった話、薬剤師になる迄のYを育てたあなたの苦勞など私の知っている限りの話をして、Y夫妻にどうか余命幾何もない伯母さんをどうか暫らく辛抱して大切に上げて下さいとお願ひしてみましよう。又あなたたちから伯母さんに何か注文があれば、この際はっきり言ってお下さい。私から伯母さんに注文をいたしましう、そしてどうかこの家を明るくするようにお互いに努力いたしましう。私も伯母さんから見れば二、三歳年は若いのですが、老人を喜ばすことなんか実に簡喜なことです。些細なことでも相談してみたりして呉れるだけでも嬉しいのです。どうか暫らくの間でずからお伯母さんを認めてあげて下さい」と言うことにしたらどうでしょう。

そうして頂けばこれからは最後には和尚さんがついていて下さると思うだけで辛抱も出来そうです。又心も落着くと思いますと変な格好にて一応解決がついたのです。

「それから毎月I和尚さんがおまいりになる時あなたはどうしていますか」

「仏壇は二階にあるので、私は下でお茶、お菓子の用意を

しております。嫁には信仰心が無いので困るのです」

「それはいいけないと思います。私は浄土宗日常勤行式という本をあげますから、この本を見て和尚さんと一緒におつとめをするようにしなさい。そうすればあなたの気持ちも落ちつくと思います。そして出来ればお嫁さんに、私も今月から心を入れ替えて信心をしたいと思ひますから、あなたすみませんがお茶、お菓子の用意をして下さいませんかと言って頼んでごらん下さい。このようなことが案外一家が巧く行くかも知れません」

「それから今の世の中は日本国中老人を大切にしないようになってしまっているのです。あなた一人だけで無いということも良く考えて下さい」

それからのI和尚さんの便りでは、以前に比して家庭内が温かくなったように思われますとのことで、私は一安心しております。

念佛ひじり三国志

(土)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



光堂の境内で、馬のいななきがする。

こんな深夜に何ごとであろうか。

僧房で書見していた明遍は、気になって境内で出ていった。

二頭の馬と人影が一つ。

「九郎どのではないか」

「まだおやすみではなかったのですか」

「どこへ参られる？」

「はい……これから奥州へ旅とうと思ひまして」

「奥州へか」

じろりと九郎義経の装束を眺めやった。なるほど狩衣姿であった。二頭いる馬も替え馬と思えば納得できる。

しかし……どことなくうさん臭いものが匂ってくる。

「では旅路に気をつけて」

「しばらくお別れさせて頂く」

九郎は丁寧に頭を下げた。

僧房へ引きあげると見せかけて、明遍は太い立木のかげに

身をひそめた。

果たせるかな別な人影が馬のところへ近づいてきた。

何やら九郎義経と密語をかわしている。五郎次にまぎれもなかった。

二人が栗毛にうちままたがったところで立木のかげから出た。

「五郎次、どこへゆく？」

「あ、明遍さま」

「この者も奥州へ参ります」

九郎が機敏に説明した。

「法外なことをたくらんでいるのではあるまいな、五郎次」

「法外なこととは？」

「例えばだな、平相国に夜討ちをかけるとか」

「いけませぬかな」

「わずか兩名だけで何が出来ると思うのか。まだ時機ではない」

「い」

「いつまで待てと明遍さまはおっしゃるのですか」

「いつまでと……平相国の寿命は長くはない」

「なぜ？」

「訊き返したのは九郎義経だった。」

「武士は戦さをしておらんと短命なものだ。まして近ごろ平

前号のあらすじ

承安五年（一一七五）、法然はすでに専修称名念仏の法門を確立して、西山広谷に遊蓮房円照とともにあった。この年も、七月に安元と改号され、秋も深まって宇治平等院鳳凰堂では、九条兼実を施主とした「百僧会」が修法された。明遍も三論の学匠としてこの法会に名を連ねたが、すでに桑門の權威となっていた信西入道の遺児達の存在は大きかった。ことに無位の僧である円照も労働の病身を押して、その痛々しい姿を見せていた。敬愛するこの兄の有様は明遍に大きな不安の影を残したが、兄は毅然として専修念仏の信念の決意を新たとするばかりであった。しかしそれにもまして「百僧会」の座主を勤めたのはほかならぬ平相国清盛でもあったが、さらに光堂の五郎次老人の要請で明遍が侍者とした童子——つまり源九郎義経の登場は、同席した快僧俊乗坊重源の心をも動かしした。

相国の暮しぶりは竹の園生そのもの。あれでは身が腐る」

「良いことを承わりました。座していれば平相国が先に死んでしまう、ということですか。では」

莞爾と微笑んだ九郎は馬の尻に鞭をくれた。五郎次も追尾しながら、

「明遍さま。今夜は大殿でひと夜ご看経して下さい」

と、叫んだ。

なぜひと夜を看経しなければならぬのか。

〈降魔の章〉



七五

問いかえす暇もなかった。二人は月が沈みかけ、闇がしとど深まった左京の街から姿をかき消した。

五郎次の頼みを聞いてやり、大殿にこもった。灯明をともし、大般若をひらいた。

降魔の章を読んでやることにした。

——深い仏智を身につけていれば、たとえ悪魔が彼を犯そうとしても魔の大軍は灰燼に帰し、魔の弁説は封じられ、その畏は断ち切れ、魔群は退散するであらう。

その魔群とは、いったい何者か。

五郎次の身邊にいるのか。それとも彼の内心にひそむ魔者であるか。

大殿での深夜の看経を終えた明遍が僧房でひと眠り。いやすでに戸外は白々と明け初めていたから、ふた眠りもしたに違いない。

喝食たちが境内で騒ぐ声に眼をさませたのだ。

火事——

その言葉を聞き分けて、僧房を飛び出していった。

明け初めた暁方の空、西の彼方に白煙がたなびいている。

「どのあたりになるかな」

「それは六波羅の方では」

喝食の一人が答えた。

「六波羅か……」

偶然の一致だろうか。明遍の不安は深まった。

五郎次の暴走それ自体もだが、源義朝の遺児九郎義経が共犯だと知ったときの平相国清盛の復讐が恐ろしかった。復讐は上は廟堂から下庶民にまで無差別に及ぶ。密告者が続出して横行して、噂の輪を限りなく拡大させてしまうからだ。

これまでも何度かあったことだった。

「お前ら見て来ぬか」

「はい」

ためらう表情だ。すぐに気づいた。

「わしの粥をくれてやろう。今朝は食わぬからな」

「いってまいります」

何か頼めば相応の駄賃が必要だ。当時は通貨が特定の階級でしか使用されていなかった。

接客用の上等な粥でも与えれば飛んでいってくれるのだ。

しかし明遍がこの少年僧二人を六波羅へ送り出したことが一寸した事件になった。

すっかり朝になって、光堂界限の街が動き出しても二人は戻らなかった。六波羅の火事はたいしたことないらしく、朝寝坊の人間には知らぬ者も多かった。

もう昼下がりである。

ようやく少年僧の一人が境内に姿を現した。へとへとに疲れきっていた。

「いったいどうしたのか。どこへいったのか。連れの者はどうした？」

明遍の矢次早の質問に「亀」という呼び名の喝食は眼を白黒させるだけだ。

疲労だけではない。何やらひどくおびえていた。

しかもやっとひらいた口が、

「粥……朝粥を」

空腹を訴えるのであった。

二一

亀が語ったところによると――

払曉の火事は間違はなく六波羅のどまん中で、平家本邸の門番小屋を焼いたそうだ。深更の強い西風が曉方ばったりやんで、大事に至らなかったという。あのままの風だったら本邸を総ナメにしただろう、と近隣の表は語っていた。

そんな話を聞いているところへ隊伍を組んだ見廻りの武士がやってきた。二人の喝食を見ると、

「いたぞ、小坊主がいたぞ」

と彼らを捕らえにかかった。

そこは身軽な二人のことだ。機敏に逃げだした。

亀はうまい具合に付近の民家にもぐりこんだが仲間の右近はとうとう捕らえられてしまった。

よほど度胸のいい少年とみえ、亀は仲間を救い出すべく再び六波羅の廓内へ潜入した。門番小屋の焼け跡に接近してみたりした。

「女が二人、庭木に縛られていて、その横で右近の奴も坐りこんでいました。見張りがいるので、どうにもなりません」

「女が二人か。年ごろは？」

「お婆さんと、それから変る若い女でした」

「変な若い女」

「舌をだらりと出して、縛られたままにやにや笑っているんです」

明遍は、ハツと思ひあたった。あの鳥辺野の洞窟にいた女たちに違いない。老女は五郎次の女房菊であり、若い女は悪源太義平の娘だというあの狂女なのであろう。

とすれば、五郎次たちが奥州へ下ったのではないことが確実だった。

「それにしても明遍さま。平氏の武士はなんで私どもを捕ら

えたのでしょうか」

「うむ……」

「小坊主がいたぞだなんて、まるで前から私どもを探がしてでもいたように」

「何だろうなあ」

明遍はとほけないわけにはいかなかった。うっかり洩らせない秘事なのである。

おそらく火事のさなか、平家の者が九郎義経を見かけたのではないだろうか。

九郎は昨日喝食姿になって平等院へ出かけている。狩衣は着たが烏帽子の下は剃髪していた。六波羅の街を駆けめぐるとき、烏帽子は脱ぎ捨てたかも知れない。しかも小坊主の亀たちを捕らえるところを見ると、九郎義経は無事に逃げのびたようである。

明遍は亀を厨房へ連れていった。タラ腹食べさせてやってくれ、と自身で頼んだ。芋粥をががつ食いながら、

「あれで、右近も斬られてしまうのでしょうか」

仲間の身を案じた。ちらりと見上げる視線に、いささかの非難がこもっている。なぜそんな危険な場所へ自分たちを送りこんだのか。右近の身に万一のことが起ったら、責任はあんなですぞ、と言いたげである。

明遍は五郎次のことを考えている。九郎義経ともども無事に逃げ伸びられたのであろうか。

こんな事件のため、明遍は奈良へ帰ることを翌朝まで伸ばすことにした。その夕刻である。明遍の居室へ光堂執行の僧都がはいってきた。

「喝食の右近なる者は今朝六波羅へ出したのは明遍どのに間違ひありませんか」

詰問口調だった。

「右近はどうした。戻ってまいったかな」

「戻るには戻ったが」

僧都は促して書院へいった。そこに数人の武士が控えていた。背後に右近が坐る。縛れめは解かれていなかった。

「おう、右近、無事だったか。気の毒をしたなあ」

明遍は喝食にやさしく声をかけた。

「いかなる理由でこの者を火事見届けに出されたのか」

武士団の長らしい髭面の男が言った。これも訊問口調であった。

「いかなる理由と」

とつさに智恵がひらめいた。清涼殿の庭で蹴鞠をしていた若い公達の顔を思い浮べた。

「六波羅あたりが火事と聞き、維盛卿の邸が気にかかってな」

「維盛卿——」

「様子を見にゆかせたのじゃ。万一火でもかぶっていたら、早速お見舞に参上せねばならぬ」

「若殿とはご懇意の間柄で」

「さよう。つい先ごろも清涼殿の最勝講で一緒したばかりだ」

「それはそれは。じつは手前ども、四位少将に仕える者でございます」

髭面のあいだに、恐縮の色が立ちあらわれた。権威には弱い男のようである。

「それで火事はどうであったか。街人の噂ではだいに至らなかったと聞くが」

「はい、門番所を一棟、焼いただけですみました」

「さようか。維盛卿には明遍からくれぐれもよろしくと伝えて下さい」

「判りました。明遍までございますね」

念を押してきた。反撃する好機であった。

「それにしても維盛卿はなぜこんな喝食などを搦め捕ろうとなされたのか」

「それが昨夜の火事、放火だったのでござりますよ。それも仕組まれた放火で」

と、髭の武士はくわしく火事の顛末を語ってくれた。明遍を平氏の一味と信じこんだのであろう。

弘暁のこと。まず騎馬の者が六波羅の侍屋敷へ炎の草束を投げてまわった。混乱がおこると女二人が平家本邸へ潜入、あちこちに火を放ったというのである。六波羅を灰燼に帰そうとねらったことは間違いない。

「その騎馬の者が喝食姿であつたのですから」
亀の報告と明遍の推理は完全に裏書きされた。

「騎馬の者は搦らめ捕らえられなかったと言ふのだな」

「いや、一名だけは。しかしその者は喝食姿ではござりませなんだ。老人で」

「老人か」

五郎次はやっぱり捕らえられてしまったのか。彼が光堂の鐘つき守だという正体を告白してしまえば、今ごろ此処もこのように平穩な姿ではいられない。

万事を諒承し、右近の細目を解いて平家の武士団は六波羅へ引揚げていた。

三

翌朝、奈良へ帰る足を明遍は六波羅へ向けた。

不当な勇氣が胸に湧いた。ひと目でもいい。五郎次老人に会つてみたくなつたのである。

広い六波羅の屋敷うち。五郎次が捕えられている維盛邸は、喝食の右近からくわしく聞いた。

なるほど大門の左手、門番所は焼け跡になつていた。取片づけの雑人たちが仕事をしていた。

見とがめられた明遍は身分を告げ、さらに昨夕聞いておいた足沢左兵衛という名前を口にした。

じきに髭面の武士が現れた。

「やはり維盛卿にひと目お会いしたく思つてな」
「さようでございますか。では此方へ」

と左兵衛は先に立つて案内した。

まさしく廣大である。池がある。築山がある。林がある。

その間に点々と邸が散在していた。邸内がさながら一箇の都市であつた。これでは女の手などで焼き滅ぼせる道理がない。九郎も五郎次もこの廣大さを計算してはいなかつたのであるかろうか。

やはり暴挙である。

維盛は気軽に会つてくれた。昨夕左兵衛から見舞を伝言しておいたので、なおさらである。

相変らず凛々しい若者であつた。

「ちと氣になることがありましてな」と、明遍は来意の目的を洩らした。

「何のことで——」

「こちらに捕らえられている老人に心当りがあるのです」

「ほほう」

維盛は微笑んだ。

五郎次が何としてでも口を割らぬので手を焼いていたに違いない。背後関係を追求できぬからである。

築山のかげに石牢があった。五郎次はそこにいた。妻やあの姫の姿はない。

「おう、六道ではないか」

明遍は思いつきの呼び名を口にした。

六道の辻からの思いつきだった。

「どなたさまでしたから」

五郎次はシラを切っている。

「東大院の明遍だ。そちとは東大寺で何度も顔を合せたことがある」

「……」

「まだあのころの癖がなおらぬと見えるな」と、かたわらの維盛をかえりみた。

「奴は何者で」

「東大寺の僧房にいた堂衆でしてな。そのころから火の好きな男でした。いつも焚火ばかりしおって」

「なるほど火魔でしたか」

維盛はうなずいた。

放火の病癖であると告げて、五郎次を政治から分断してやるのが明遍のねらいであった。うまくゆけば釈放されるかも知れない。

「しかし女二人と共謀して」

維盛は簡単に受けいれようとはしなかった。

「あれは六道の妻と娘のはずです。似た老夫婦でな。あれの妻も火が好きで」

明遍の作り話に若い公達は言いくるめられそうになった。だがこのとき高らかに笑い声が石牢のなかに響きわたった。

「明遍さま、あなたはご存じなのです。私の一面しか見てはおられぬのです」

五郎次老人はわめくのであった。

「火魔のほかの一面とは何だ」

維盛は詰め寄った。

「申上げるが此処ではなりませぬ」

「どこで申すのか」

「この邸内に薬師さまが祀ってあるはずで」

「それはある」

「そこへ連れて行って下され。薬師さまの前で、すべてを申し上げます。それから平相国さまにもその折はお立会い下さるようお願い致します」

どうやら五郎次はそんな機会を待っていたようである。

明遍たちが去ろうとすると、五郎次は維盛を呼び止めた。

「女どもも一緒に頼みます。伴もですよ」

「伴？ ああ、喝食はわれの小伴か」

「さようか」

「どこぞへ逐電しまったわ」

維盛は憎々しげに言い放った。

「そうですか。逐電致しましたか。さしもの平家侍もあの伴を捕らえることができなかったのでございますか」

五郎次は笑しげに笑いながら、ちらりと明遍に視線を寄越した。九郎義経が無事に逃げおおせたことを悦ぶ眼であった。

四

五郎次の希望はすべてかなえられた。清盛も臨場すること承諾した。ただし告白のあと、ただちに五郎次たちを処刑することを命じた。それも火刑であった。薬師堂の前に三本

の鉄柱が打ちこまれ、周囲におびただしい薪が積み上げられた。

そこで明遍は初めて平相国清盛と言葉をかわした。これまではあちこちの法会で顔を合わせるだけで、まだ口をきいたことがなかったのである。

「このたびはし痴れ者の身もとを証かしにいろいろと骨折ってくれたそうじゃな」

政治家らしくソツのない調子で、清盛は感謝の言葉を述べた。

そのあと、

「明遍どのは人間の火あぶりを見たことがあるかな」

「ございませぬ」

「出家の身ではさもあるうのう。しかしそれは見事な眺めだ。とくにご覧じあれ」

「見事とは」

「人間の身体がな、網の上の魚のように反りかえってな……うむ。今日は女二人もいるか。女の火あぶりはまだ見たことがない」

清盛は涎れをたらさんばかりの表情だ。何という残忍な男だろう、と明遍はぶ気味になった。

五郎次たちは三本の鉄柱に縛りつけられた。



間いつめ役は維盛の配下、足沢左兵衛であった。樫の棒を握り五郎次のかたわらに立った。

「名を名乗れ」

「うるさい。此方から順序立てて語ってやるわい」

そこで五郎次は妻の菊女にやさしい眼を投げた。

「菊よ。わしはこの日、この時を待っていたのじゃ。よくまな、こをひらいて見るがよい。あそこにいるのが平相国清盛じゃ。その隣りが孫の維盛」

「公達さまを呼び捨てるとは何だ」

左兵衛が樫の棒で首すじを叩いた。

「公達だと。何を吐かす。ただの小童っばではないか。重盛がおらぬな。あの平治の乱の折、義平さまに追いまくられて御所の板の間を逃げまわった卑怯未練な平家侍は」

清盛が床机から立ち上がった。

「うぬは悪源太義平の手の者か」

左兵衛なぞにまかせておれぬ。清盛の顔は激怒に染まっていた。

「源家の嫡男、義平さまの寵臣、小松嘉門とはわしのことよ」

「そんな名は聞いたこともないわ」

清盛はやり返した。

「わしのことなぞ知らんでもいい。平相国、そちらの姫君に

見おぼえはないか。義平さまの忘れがたみ、桔梗姫であるぞ」

「桔梗……」

「うぬらが探索して、大和の在から引ッ立てて、ここの薬師堂へ押しこめた桔梗姫じゃ。まだ十四歳のあどけないお身体を、日ごと夜ごとみんなして凌辱しおって、見よ、姫はそれ以来……」

相変らず狂女は笑っていた。周囲に群らがるおびたしい男たちを見て、楽しくなったのであろうか。

「平相国、お前の身体は近いうちに必ず焼かれるぞ。姫君をずたずたにした天罰で必ず焼かれるのだ」

「やかましいっ」

清盛も絶叫した。こんな無名の侍と同じペースで昂奮するあたり、清盛には未だ野人の血が残っていたようである。

「平相国、お前だけではない。平家の一門、みな焼かれるのだ。地獄の底へ叩き落されるのだ」

「もうええわい。それっ火を放て」

清盛は命ずる。雑兵たちが薪の山に火をつけてまわった。たちまち白煙が三人の姿を包んだ。

五郎次の声が響いてきた。

「明遍さま、明遍さま。お経をお説み下され。わしも地獄へ

堕ちてまいりますっ」

火勢がつのると白煙は消え、炎の中で三人の姿が浮き彫りになった。

すでに三人とも息絶えていたのだろう。しかし肉体だけは不思議な動き方をした。

とりわけ若い桔梗の動きは凄まじかった。首を振る。股をひろげる。身をよじる。前のめりに落ちようとする身体を、新しい炎が突き上げる。いっばいに身を反りかえらせる。

すでに女肉は焼けただけ、茶褐色に変じている。しかし一部分で白い肌も残っていた。生と死との混色だ。

この混色が、炎の舞踏のなかで妖しい輝きを放つのである。濃艶だ。好色な蟲惑であった。

経文を口ずさみながら、明遍はともすると見惚れてしまう。おのれの体内に棲む魔性に、ハッと気づき、あわててまた経文の誦唱にかえる。

かたわらで清盛がわめいていた。

「もっとなんせ。燃やせ。焼くんた。その死肉を一片余さずに焼くんた」

やはり悪鬼の怒号であった。

ふと若い公達の維盛へ明遍は視線を投げた。彼は顔をおおい、身をゆるゆるとうちふるわせていたのである。(つづく)

お 願 い

会員各位のご理解ご芳情のもと、本会も今年で創立四十周年を経過し、殊に機関誌「浄土」は昨年四月号より増ページをし、誌面の充実につとめてまいりました。しかし、今更ながらに諸物価、諸経費の高騰により、今年年会費改訂に踏みきらざるを得ない状態に至りました。事情ご賢察の上ご了承賜りたく、今後共よろしくお願い申し上げます。

新 年会費 二、〇〇〇円

記

会員各位

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○百花撩乱の好季を迎え、行楽の人波が野山を埋めつくす。永い厳しい寒さから開放された心情が一気に爆発し、自然に戸外へ足が向くためであろう。しかし、この季節になると毎年のことながら、うかれ気分も手伝う訳ではあるまいが、様々な事件がひき起される。こういう時にこそ、大事に至らぬ前に自省し、共に所謂うらかな春を過したいものだ。

○今月号から十二回（一年）にわたって掲載の「書の四季」は、書道を通して四季折々の話題を提供いただくことになっている。今日の文明社会にあつて、視聴覚にうつたえる分野は様々な研究がなされ、それ相應の成果があげられているが、書くということとは、ついつい面倒なためおろそかになりがちである。書の道ひと筋、いよいよ円熟味を加えられた林錦洞先生のご健筆に期待し、この機会に書くことが身につき、そののしみがお分りいただければと思う。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄 土 四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十年三月二十五日 印刷

昭和五十年四月一日 発行

編集人 宮 林 昭 彦

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 関 二 三 男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

「浄土」教化トラクト
教育えほん
『ほうねんさま』

B 5 判 12 ページ 定価 200 円

『五重相伝の手引』

A 5 判 16 ページ 定価 85 円
(200部以上 80円・送料実費)

『和文浄土三部経』

附 法然上人撰「三部経釈」抄述
新書版 204ページ 定価200円

好評『法然上人と浄土宗』

B 6 判 96頁 定価180円 (〒70円)
(200部以上 単価160円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番